

2月の生活表

2024年 2月

聖マリア幼稚園

年主題：つながって ～今、わたしを生きる～

月主題：わかちあう

保育日数（17/19日）

月目標：<3歳児>

*礼拝を喜び、生活の中で自分から賛美したり祈ったりする。

*子ども同士で遊びを分かち合い、試行錯誤して楽しむ。

*庭の木の芽や鳥の声の変化に気づき、季節の移り変わりを感じる。

<4・5歳児>

*イエス様につながっていること、私たち一人ひとりを知ってくださることを感じ、安心して過ごす。

*互いの存在を認め合い、なんでも言い合える関係の中で、心躍らせながら遊びを深めていく。

*冬の自然の中にも次の季節への備えを知る。

今月の月主題は「わかちあう」そして月聖句はチャプレンコーナーに書かれています。「わかちあう」ってとても難しいですね。私たちが置かれた場・時で何をわかちあうのか、その方（園児）の気持ちに添えるのか、特にそれぞれの心の壁に寄り添うってことの難しさかと思えます。私が、長くこの場に携わらせて頂いてきた中で、神様からの「命の息」が亡くなるという本当にたくさんのお別れがありました。大切な伴侶や両親を亡くした時の悲しみ、お世話になった先生方、友人を亡くした時は勿論ですが、この園に有っての悲しみを覚えるほど辛いものはありません。30年前、緑組を担当していた時の一学期の終了日。「先生、僕今日からおじいちゃんところに泊まりにいくねん」「いいやんか、おじいちゃん何して遊ぶの」「セミ取りやな、いっぱい木があるし」「へえ、楽しそう。おじいちゃんにも手伝ってもらってたくさん捕まえてきて。そして、最高何匹取れたか教えてね。で、セミさんの命って短いし、また逃がしといてあげるといいわ」「うん、わかった」と会話をしたのが最後。その後聖公会の全国研修大会で鳥取へ。京都に降り立った時に当時の園長先生夫人（事務担当）から電話が入りました。「実は〇〇ちゃんが亡くなったってお母さんからご連絡があり・・・病院は・・・」と。帰宅せず、その場にいた先生二人とすぐに駆けつけました。ご家族の悲しみは如何ばかりか。そして、この1月26日に訃報が入り、懇談会後の先生たち一同に伝えました。コーラスでお世話になっている由理先生のご長男（お父さんは幼稚園理事）です。年長に進級する前に受診を勧め、キンジスと診断されて以来の経過を辿る中でのご家族の心の綾に触れさせて頂いてきましたが、とうとうその日が訪れ、彼は29年の生涯を閉じ、神様の御もとへと旅立ちました。嬉しい結婚式とは異なり、人生を終えられた方のその場でお出会いする方々は、再会を喜べる時でもありながら、とても悲しい時でもあります。「こんな場でしか会えないって・・・」との言葉をもって、その人が出会わせてくれた再会となります。今回、沢山の卒園生とそのご家族に再会を致しました。このふたつの経験の中で、若くして教え子の命がなくなることの悲しみは先生の立場としては、あって欲しくないものなのです。ご本人と夫々のご家族との関係性は様々です。それぞれの方々がその時々々に寄り添ってこられました。自分はその中の一点に過ぎないのですが、6年間あるいは29年間見続けてきた彼らに、自分はどれだけご家族とその気持ちを「わかちあえた」のかなと考えます。この悲しみを通して、偶発的に起こる自分の知らない方々の「命」にも想いを寄せねばと思います。そして、幼児期に私たちに楽しい思い出を残してくれたお二人に感謝し見守って頂けることを祈ります。

《チャプレンコーナー》

年主題：つながって ～今、わたしを生きる。～

年聖句：2月月間主題：わかちあう

月聖句：喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

(ローマの信徒への手紙12：15)

能登半島地震で被害を受けた方々が、一日も早く穏やかな日常を取り戻されることを、心からお祈りします。

地震発生から1か月が経った今でも、上下水道をはじめ、日常生活の基盤が回復していません。どれほど苦しい生活をされているのかと思います。

先日、能登半島の入り口辺りにあります、社会福祉施設を訪問しました。同じキリスト教系の施設で、大阪の同様の施設代表の方と一緒に、お見舞いに行きました。その地域は幸い被害が少なく、電気、水道もほぼ不自由なく使うことができます。ただ、そこより北上すると、すぐに断水している地域に入るそうです。能登半島の中程に、同様の施設があり、そちらは本当に大変で、職員の方々は、ご自身が被災されている中で、利用者の方々のために日々出勤されています。ただ、仕事に励みながらも心の中は「茫然としている」というのが、正直なところだそうです。

地域の様々な写真を見せていただきました。報道で目にするとおりの、甚大な被害です。復旧までに長い時間と多大な労力が必要になることでしょう。

「同情」という言葉があります。英語ではコンパッションと言います。これは「コン：共に」と「パッション：苦しみ」を合わせた言葉で、「共に苦しむ」という意味になります。苦しんでいる人と共に苦しみ、共に新しい道を探っていくこと、それが「同情」の意味です。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」これは正に、「同情する人になりなさい」という教えです。簡単な教えではありません。けれども「難しい」「無理だ」と諦めてしまうのではなく、粘り強く、自分なりに、やり方を考えていきたいと思えます。

おたんじょうび おめでとうございます

<生活指導>

☆冬の健康に気をつけましょう。

- ・まだまだ余談の許されないコロナと今冬は非常に流行っているインフルエンザ。双方の予防を心がけ、できるだけ感染しないように、帰宅した時には、手洗い、うがいを施行し、規則正しい日々を送りましょう。
- ・十分な睡眠（早寝・早起き・朝ご飯・朝ウンチ）そして、バランスの取れた食事をご用意ください。体調の悪い時には、消化のよい食事をお願いします。

☆親子(家族)の対話を大切にしましょう。

- ・絵本や素話、日々の出来事や新聞掲載の社会事象等に触れながら、家族で話し合いをしてみましょう。
- ・年齢（個々）に合った対話を心がけ、お子さんの考えや感想や反省も含めて、しっかり家族として受け止められる機会（発言の場）を持ってあげましょう。

☆冬から初春を迎える自然の移り変わりに目を留めてみましょう。

- ・園の周りの草花、樹木にはどんなものがあるのでしょうか。春を見つけてね。
- ・暦上の節分の意味を知り、太陽の明るさ、日の出、日没時間の変化、雑草の芽吹き、木の芽枝等の変化を見つけ合い、心の養いとしましょう。

<クラス担任より>

[花組]

一年で最も寒い季節だけれど暦の上では間もなく立春を迎えます。けれど...「雪、積もって欲しいな〜」「雪だるまが作れるくらい!」そうですね。子どもたちにとって時々空から舞い落ちる雪を目にしながらも、なかなか歌や絵本に出て来るような雪には出会えず、遊べず...。子どもたちが春を感じ始める頃に、雪の思い出が小さくても心に残るような経験が出来ればいいな、と思いながら、先日「雪だるま」の絵画制作に取り組みました。①お庭の土の上に【茶色い画用紙】雪が積もればいいな〜と、雪を降らせました【白いクレヨン】。②うん!雪、積もったから「雪だるまを作ろう!」雪だるまの頭と身体の二つの丸を作って【白い画用紙に思い思いの丸を描いて、ハサミで切る】③雪だるまを完成させよう!ヨイショと頭を身体に乗せてあげて...【糊で貼

る】④「雪だるま」にお顔、そうだ！お帽子にマフラー、手袋もいいな～お飾りをつけてあげよう！【クレヨンで描く・色画用紙を切って】。と、④の工程は、クレヨンで何を描くのか、色画用紙の色選びやハサミを使う・糊で貼る。を一人ひとり子どもたちの思いを大切にしながら取り組みました。そして、今回は「先生にお手伝いして欲しかったら言ってね～」とも投げかけました。すると、「せんせい、お帽子、バケツに切ってください！」等、早速にお手伝いの依頼が入ります。ここから、まずは「お帽子、バケツにしたいの？いいね～どんな形にしたいの？」「う～ん、四角！」「ほな、好きな紙（色画用紙）を取ってきて、切ってみたら？」「うん！」とすぐに、お手伝いを依頼していたけれど自分で出来るな～と気づき『やってみる』姿が見られました。それでも、これだけでは難しい場合もあります。「先生、どうやって切ったらいいかわからないの...」という声もあり、「そっか、そうしたら～その紙（色画用紙）にクレヨンでお帽子描いてから、それを切れればいいよ～」「わかった～！」と自分が切ることを頭に置いて『考えながら』『やってみる』姿が見られました。また、先生にお手伝いを依頼することなく、お友だちと先生のやり取り・お友だちの取り組みを見て、やり方に『気づいて』『やってみる』姿もありました。もちろん、「これは先生に切って欲しい」の言葉に、理想の〇〇を作ってもらって、それを飾りたいんだ！という『思い』が感じられ、その場合は喜んでお手伝いしました。今回の絵画制作は、とにかく思い思いに！取り組み、子どもたちが創造し、それを再現しようとする姿を大切にしました。絵画や制作では、先生の説明を聞いて・お手本を見て・理解して取り組む...ということを中心に、それぞれどれだけの説明で理解できているのか、手先の巧緻性はどのくらいか、色や形を捉えられているのか、個別対応が必要であるか...等を見ながら指導をし、必要な援助をしています。そして、出来上がった時にどんなお顔で満足感・達成感を得ているかな？出来たことで自信がついたかな？疲れたかな？物足りないかな？等々、様々な視点で子どもたちの姿を見ています。どんな姿も知りたい！成長を見逃したくない！それは絵画や制作に限らずです。自由遊びでの姿、お食事中的一コマ、絵本や紙芝居への反応、スキップやゲームの時の姿、おトイレでのあれこれ、何気ないお喋りでの気づき...。そして、それを保護者の皆様と共有し子どもたちの「今」をわかちあいたいという思いです。そんな、花組の毎日も残すところも2か月を切りました。後どれだけ子どもたちの様々な姿を見られるのだろうか...大切に、過ごしてゆきたいと思います。

[赤組]

♪雪のペンキやさんがお空からチラチラ～ 雪の日、子どもたちから自然と歌声が聞こえてきました。やはり雪景色を見ると心弾まずにはられません。今のこの冬の季節でしか出会えない自然を肌でたっぷりと体験できることを幸せに感じました。思い切り楽しんだ後の子どもたちの表情はキラキラ輝いています。 さて、3学期に入り緑組になる準備を色々な形で始めている赤組さん。ご家庭でも耳にされていることかと思えます。3学期の初日、赤組のお部屋に置かれた1脚の緑椅子。緑組になる準備として、緑組さんから貸して頂いているお椅子です。その椅子を前に、ひとつ大きくなるための準

備として、どんなことをすればいいのか？子どもたちと考えてみました。背筋を伸ばして椅子に座ること（時間が長くなればもちろん無理ですが）、苦手な物を頑張って食べること、今は話して良い時なのかを考えること、友だちの気持ちにも気付くこと、そして自分の気持ちを言葉で表すことなど。大きくなるために頑張ることは一人ひとり違いかもかもしれませんが、その上で、自分が頑張ることって？さらにご自分たちに置き換えて考えてみました。最初は「う～ん」と悩んでいた子どもたち。その時間ずっと自分自身を見つめ直していたことでしょう。こういった機会をもち、考え、進級すると言うことがどれだけ子どもたちにとって大きな意味をもつのか痛感しました。他にも「見習いサーバー」で緑組さんが金曜礼拝で担ってくれていたことに目を向けたり、お片付けでも棚に戻すだけでなく分別をして整えて片付ける方法を教えてもらったりと次は自分たちが担うんだ、教えていくんだ、と心掛けながら日々過ごしています。この調子で前向きに進級出来ればなと思います。個々の成長はもちろんのこと、集団生活で社会性を育てている赤組さん。集団で一つのことを成し遂げる「共同制作」に取り組みました。少しクラス便りでも触れましたが「ポカポカホテル」を題材に制作していました。まず最初、大きな木を描くこと、それは簡単なことではありませんでした。子どもたちそれぞれの「木」のイメージや「大きさ」の違いを一致することが出来るように様々な角度から「木」について考えました。その後、木の幹からリレーのようにバトンタッチして木を描き進めましたが、思い悩んだタイミングでお隣の小さなお庭の桜の木を実際に見てみると「コブがあったよね」「ちょっと斜めにしてみたら？」とどんどん意見を交わしながら立派な木が出来上がりました。次に生き物はどうでしょう。好きな生き物！ではなく「冬眠する生き物」です。冬眠する生き物を調べてきてもらいました。特徴や大きさ比べをしてからご自分で好きな生き物を選びます。画用紙に生き物を描き表すとき、図鑑で調べて見ながら描きましたが、どの種類の図鑑に載っているのか考え、ページを当てます。一つの生き物でも種類が多くあり「面白い顔！」「ウサギコウモリかわいい！これにしよっと！」「赤色かっこいいな～」と気付きがあり、気に入ったものを描いていました。では、スリッパです。そもそもスリッパって知っているの？と聞いてみると「？」の子も多かったので、トイレのスリッパ、先生が履いているスリッパ、色々な形があることを知らせ、今回はそれぞれの生き物に合わせ、また他の生き物との大きさを考えながら好きなようにスリッパを作ることにしました。好きな色画用紙を選び、形をイメージしながら鉛筆で表し、納得いくとハサミで切りました。足を入れる上部を布団のようにモコモコにしたり絵を描き入れたり、個性溢れるデザインのスリッパになりました。それをぶら下げるのですが、ぶら下げるってどういうことか身体をつかって実際に試してみました。先生の腕にぶら下がり、それをスリッパ置き換えます。1人女の子が「スリッパに穴を開けて紐を通したらいいんじゃない？」と提案してくれました。この取り組み一つでも紐の「長さ」、つける枝の「太さ」、各生き物の「重さ」「大きさ」の様々な要素が含まれており、子どもたちは頭を悩ませながら無事に仕上げる事が出来ました。この共同制作の取り組みの中で、このように子どもたちにとって沢山の考える場面、そして学びが含まれていました。達成感と共にまた一つ成長したことと思います。

残り2ヶ月、赤組さんで過ごせる一日一日を大切に、11人で感情をぶつけ合いながら受け入れ合いながら、共に進級へと向かっていけるように支え、過ごして行きたいと思

います。

[緑組]

ある日の昼食...「ねえ、先生。赤ちゃんってどうやってお腹に入るの？」と唐突な質問。口に入れたご飯を喉に詰めそうになったとき「それはさあ～あ、神様なんじゃなあい？」と答える声が...。「ええっでも、どうやって、神様がお腹にいれるの？」「それはさ、ふう～って、動物とか生き物にするみたいにするんだよ、きつと」。毎年、金曜礼拝の聖話は旧約聖書の「天地創造」から始まります。『初めに神は天地を創造された...』やがて、神様は草木を生やし、水辺の生き物・大空を舞う鳥、地に生きるもの這うもの、獣を造られます。そして最後に『神は人を自分のかたちに創造された』のです。この聖話を聴くとき、「命の息を神様が吹き込んでくださる」のだと...口元を両手で筒のように覆い「ふーっ」と息を相手の口に吹き込むように話してくださいます。その光景を、子どもたちは印象深く記憶にとどめているのでしょうか。そして、神様にしか「命の息」はないことも子どもたちはいつしか理解し、「命」の大事さに気づき、尊んでいることを日々感じます。それは日常の端々に垣間見えることです。園庭の切り株の隙間に1匹のトカゲが眠っているのを見つけ、子どもたちが数名集まっていたときのことで。そっと木の皮をはぐと、ポトッとトカゲが転げ落ち、ピクリとも動きません。「死んでんの？」の赤組さん。「違うよ！なんで、冬眠してるのに、外に出しちゃったの?!」と緑組。眠っているだけで死んでしまった訳ではないことを教え、そのトカゲを新たな切り株の隙間にそっと戻してくれました。年始に起こった能登半島地震・世界各国の紛争、子どもたちにとっては遠くとも「ただごとではない」ことに心痛め、「地震が起こりませんように」「世界中が幸せになりますように」と組み合わせた小さな手の祈りに「人を思う心」が育っていることを実感するのです。昨今、自己責任・個人主義と「個」をめぐる様々な考えを耳にすることが増えました。もちろん「あなた」が「私」が大事です。ただ一方で「誰かだけ」が「私だけ」がいいものではないことを覚えておかねばなりませんね。それは「違いを認める」ことなのでしょう。人を思える心の根が枯れることなく育っていつてくれることを願っています。3学期に迎えた友だちとの交わりにも、緑組の個々の成長は見えます。互いに違う環境に育ち、集団の大きさも違う、ルールも違う、知らない言葉や習慣。「違う」と否定すれば、相手はどんな風を感じるのか？子どもたちは良く見聞きしています。「違う」のではなく「こうしたらいいよ」と方法を示す。簡単なようですが、決して容易にできることではありません。見てきたこと、聞いてきたことが「絶対の価値」である子どもが、各々の言動を受け止めよう、受け入れようとするなんて、そうそう出来るものではありません。そんな子どもたちの姿を見るたびに、この環境で培われた不確かだけれど確かなものを身に着けて、巣立とうとする年長の姿に胸が

キュンともなるのです。

「ちょっとまって！最初から人のお腹の中に、命の種があるのかもしれないよ」

「大人になって、結婚したら赤ちゃんができるんだよ」

「でも、今は、結婚しても赤ちゃんがいない人もいるよ」

「そうだね、いろいろなんだね」... って。

もう...喉につっかえそうになったご飯も、すっかり飲み込んで、子どもたちの会話と考
えにうなりそうになりました。すごいでしょ？緑組さん！